

秋の花咲く葛城山

9月12日、快晴。秋の花を求めて葛城山に登った。昨日まで、あれだけ暑かったのに、早朝バイクを走らせると、やや肌寒い気候になった。

檜羅滝コースに沢山のアキギリ

午前 7:25 葛城山ロープウエー登山口駅から檜羅滝コースに。滝の下の川原にはツリフネソウの群落が点々と。

ここから急登が続く。7合目で杉林を抜けた途端にツルニンジンの花が現れ、アキギリが続々と美しい花を咲かせている。

イヌショウマもカシワバハグマも

アキチョウジ、ミズヒキ、キンミズヒキなどと共に、イヌショウマ、カシワバハグマも独特の白い花の花茎をスックと伸ばしている。すっかり秋の風情だ。

9:20 自然研究路に入るが、ここでは秋の花は少ない。

ススキ原に秋の花々

10:05 閉店している食堂の裏の展望台で休憩、軽食後、山頂に。一面にススキが花穂を伸ばしている。まだ褐色だがなかなかの見応え。ススキ原の中や周囲に様々な色合いの花が咲いている。ワレモコウ、ナデシコ、オミナエシ、ヒヨドリバナ、ツリガネニンジン、ヤマハッカ、オトギリソウ、タムラソウ等々。

オオナンバンギセルは無かった

見たいと思っていたオオナンバンギセルは無かった。帰宅後専門家に訊くと「花期は終わっている」との事。残念。

ツツジ群落地と「小鳥の楽園コース」と名付けられている山道を巡り、往路を辿って13時登山口着。



↑アキギリ (シソ科アキギリ属)



↑ツルニンジン



↑イヌショウマ (キク科)

サラシナショウマ属)

↓カワラナデシコ



←オミナエシ

↓カシワバハグマ

(キク科コウヤボウキ属)





↑ツリガネニンジン（キキョウ科）

←タムラソウ（キク科タムラソウ属）

タムラソウはアザミに似ていますが、同じキク科でもタムラソウ属の植物です。アザミにあるトゲはありません。両者とも夫々の魅力で私たちを惹きつけます。



↑フシグロセンノウ
(8月金剛山で)

西欧で一大ブームとなった日本の椿

朝ドラ「エール」での「音」の苦しみ

コロナ禍の「おかげ」でNHKテレビの朝ドラ「エール」も再放送されて、8月の放映分は主人公の夫人「音」がオペラ「椿姫」のヴィオレッタ役で苦しみ、悩むシーンが続いた。結局、妊娠・出産のため、ヴィオレッタ役は降りることになるのだが・・・。

オペラ「椿姫」誕生の裏にツバキのブームが

このオペラ「椿姫」はヴェルディが1853年に発表したものだが、現在でも世界中で上演されている名作。オペラ劇場に行ったことのない私でも

劇 ↑二上山のヤブツバキ 写真は故澤木仁さん

中で歌われる「乾杯の歌」は小さいころから口ずさんでいた。

原作の小説は1848年アレクサンドル・デュマ・フィスが発表した「椿の花の貴婦人」で、そのヒロインを“ツバキの花”を好む女性として描いている。この背景にはツバキが西欧社会で広く愛され、大ブームとなっていたことがあるようだ。

西欧で大歓迎された日本の椿

江戸時代末期、長崎・出島の医師ツンベルグ（植物学者リンネの弟子）が1779年帰国の際にヤブツバキの苗木4本を持ち帰り、そのうちの1本が現在でもドイツ・ドレスデンのピルニッツ宮庭園で健在だとの事。艶やかな緑の葉を一年中茂らせ、冬から春にかけて赤い花を咲かせるこの植物にヨーロッパの人々は歓喜したのだ。

西欧でも品種改良で多様多彩なカメリアに

豊臣秀吉や徳川秀忠をはじめ椿を愛した著名人は多く、江戸時代その品種改良は盛んに行われたが、ヨーロッパでも大型化、華麗化がすすめられ、現在の多彩な園芸品種のカメリアを生み出している。



←二上山の白樺 写真は故澤木仁さん

椿の話① 続